



第 31 号

編集発行／碧南市

哲学たいけん村

無我苑

所在地／碧南市坂口町3-100

〒447-0087：TEL . 0566-41-8522

：FAX . 0566-41-7761

ことば
久野 昭

〔国際日本文化研究センター名誉教授、
広島大学名誉教授、哲学たいけん村無我
苑顧問〕

十七世紀フランスを代表する哲学的著作として、よく名前の上がるのは、デカルトの『方法叙説』とパスカルの『パンセ』とであろう。前者は一六三七年、後者は著者の歿後の一六七〇年に刊行された。いずれも、ラテン語でなく、フランス語で書かれている。さらに、この二作で最もよく知られている言葉となると、前者から「われ思う、ゆえにわれ在り」が、後者からは「人間は一本の葦でしかない。自然のうち最も弱いものである。ただし、それは考える葦である」が挙げられよう。「われ思う」の「思う」も、「考える葦」の「考える」も、ともに動詞〈penser〉である。

パスカルがなぜ人間を葦にたとえたかについては、たとえば旧約の「列王記・下」十八章や「イザヤ書」四十章、その他、聖書での葦の折れやすさ、弱さにかかわる記述との関連が指摘されるが、いまは、その点にこだわる必要はない。哲学の立場では、「思う」「考える」との意味が問題になる。かつてデルポイのアポロン神殿に掲げられていたという、分を弁えよとの意味合いの濃い箴言「汝自らを知れ」が、ソクラテスあたりから

本来的自己への追求のいわば標語になつて以降の哲学にとつては、デカルトを「われ思う、ゆえにわれ在り」に導いた懐疑のなかで「思う」の持っていた意味、パスカルが人間たる自らを「考える葦」ととらえた、その「考える」が持っていた意味こそが問題であろう。



一般になにかを考えると、人は言葉を通路とする。言葉を通路とせずには考えることは不可能であり、そのとき、すでに言葉は、たんなる情報伝達の日常的手段を超えていよう。私の解釈では、「思う」には「面（おも）覆（お）ふ」、すなわち外面にはなく内面にこそ眼を向ける姿勢が必要だし、また、「考える」の「か」は「住みか」「在りか」の「か」つまり現場であつて、「汝自らを知れ」は、自分にとつて基本的な場たるべき「か」へ「向（むか）ふ」、「かむかふ」ことを要求する。「ことは」とは「言（こと）の端（は）」だと古来言われてきたことだが、その「は」を手掛かりに自らの存在にかかわる根本的な「こと」に迫ろうとする

限り、心のなかで言葉の本来的意味を確かめながら進んでいくべきではないか。哲学者の追及すべき「ロゴス (logos)」とは「理法」をも、また「言葉」をも意味してきた。

ところで、これはデカルトもパスカルも当然心得ていたはずだが、〈penser〉はラテン語の動詞 (pensare) に由来する。このラテン語の動詞はもと、秤ることを意味し、そこから考慮するという意味も出てきた。彼らもおそらく自分の選び取る言葉の重みを十分に心に受け止めながら、思索をつづけたに違いない。その背景には、言葉を大切にす文化的環境もあつた。

もっとも、いまの日本では言葉がどれだけ大切に扱われているのだろうか、心ない人たちによって、日本語がいかに無神経に、無残に弄ばれてきたことか、などと今更嘆いてみせる気は、いまの私にはない。ただ、開設からはや十八年になろうとするこの施設につけられた「哲学たいけん村」という名が、年を経るにつれてますます虚ろに響くようにならぬことを、祈るだけである。



梅原猛名誉村長特別講演会

演題「古代出雲王朝について」



〈写真提供 新潮社〉

平成二十一年十二月六日に碧南市芸術文化ホールにて、哲学者で、哲学たいけん村無我苑名誉村長の梅原猛先生の特別講演会が開催されました。特別講演会の詳細については、以下の要約をご覧ください。

出雲神話についての戦後の説

戦後の日本の歴史学は、『古事記』『日本書紀』に語られている日本神話について否定的であった。日本神話は高天原神

話、出雲神話、日向神話の三つに分かれる。このような神話について、応神天皇以前の『古事記』『日本書紀』の記事はまったくフィクションであるという津田左右吉の説を金科玉条とした日本の歴史家はまったく顧みようとしなかった。

津田説は、このような神話は六世紀末ごろ、たぶん欽明朝に作られたというが、欽明朝においてそのような神話の偽造が行われた跡はない。

私は四十年前からこの津田説が誤りであると主張して、『神々の流竄』という書物を書いたが、そこで、出雲神話は大和に起こったできごとを出雲に仮託したものであるという説をとった。津田と違って私は、歴史の偽造は八世紀に藤原不比等によって行われたとしたが、出雲神話を否定する点において津田と変わりはなかった。

この出雲神話否定説には科学的根拠も存在したのである。それは、出雲には壮大な神話にふさわしい考古学的遺跡が存在しなかったということである。

考古学的遺跡の発見

一九八五年における荒神谷遺跡の発

見。農道建設の工事によって巨大な遺跡が発見され、銅剣三五八本、銅鐔六個、銅矛十六本が出土した。荒神谷遺跡での出土により、全国の銅剣出土総数は一挙に倍以上になった。また六個の銅鐔にはもともと古いⅠ式銅鐔及びⅡ式銅鐔が多かった。

次いで一九九六年に加茂岩倉遺跡が発見され、銅鐔三十九個が出土した。これによって、出雲はもともとも多くの銅器を所有する地方となった。当然このように大量の銅鐔を所有したのは王であり、出雲に王国があったのではないかという疑いが生じる。

なぜ大量の銅器が埋められたかということも大問題であるが、それらが埋められた時期はだいたい同じ紀元一世紀ごろではないかと推定される。そしてこれらの銅鐔、銅剣にはどこかに×印が刻まれている。

また出雲地方では、前方後円墳に二世紀ほど先立つ巨大な四隅突出型古墳が発見された。四隅突出型古墳の分布は出雲を中心に広く日本海地方に及び、ここに一つの政治的あるいは文化的共同体を考へねばならないことになる。

日本海地域にはヒスイ及びメノウの

生産地があり、ヒスイ及びメノウで作られる勾玉は古代人にとって最高の宝物であった。

また日本海沿岸には巨大な建築物の遺跡が多く、現在の二倍ほどの高さがあったという出雲大社はその伝統を引くものである。

最近、紀元前三百年から紀元後三百年までの六百年間と考えられていた弥生時代の始まりが五百年ほど繰り上がり、弥生時代は千年を超える長さになることになった。もちろんそれは農業が日本に根付いた時代であるが、その宝器は玉と銅器であった。もともとも貴ばれる銅器は古くは銅鐔であったが、その銅鐔が鏡に変わるのである。そしてもともとも古い銅鐔の多くは出雲で出土し、出雲を宝器としての銅鐔の発生地と考えなければならぬであろう。

このように考えると、『古事記』『日本書紀』に記されている出雲神話を根本的に見直す必要がある。

スサノオの業績

記紀神話では、出雲王朝の開祖スサノオ、大和王朝の開祖アマテラスを姉弟と考え、スサノオがその悪行によって高天原を追放され、出雲に降ったということになっているが、これは多分に、大和王朝を前代の出雲王朝からの継承者であるとともに、善の王朝であることを示すためのフィクションであり、スサノオが出

雲に降って以降の話が何らかの事実性を
もつ伝承のように思われる。

出雲神話については、『古事記』を中
心として『日本書紀』『出雲国風土記』
「播磨国風土記」などを参考にしてみよう
ねばならない。『日本書紀』ではオオク
ニヌシの話がほとんど省かれている。

『日本書紀』の一書によれば、スサノ
オは韓(から)の国から来たのである。彼
は韓の国で森林を管理する役人であつた
らしい。このスサノオが越(こし)のヤ
マトノオロチを退治するが、ヤマトノオ
ロチについては『古事記』に「高志の八
俣大蛇」とあり、越の国から来て出雲を
支配していた八人の豪族であると思われ
る。おそらくその八人の越の豪族あるい
は悪党が出雲の人を苦しめたのであろう。
その越の豪族を退治したスサノオは出
雲の国で英雄になつたと思われる。彼は
奥出雲の地で住所を転々とするが、やは
り森の管理をしたのではないか。ヤマト
ノオロチによつて荒らされた森を青々と
した木が茂る森に変え、それによつて農
業を盛んにし、出雲の人々の尊敬を得た
のではなからうか。

オオクニヌシの国造り

『古事記』におけるスサノオ王朝の系
図によると、スサノオの四代の孫がオミ
ツヌであり、その孫がオオクニヌシであ
る。オミツヌは「出雲国風土記」におけ
るヤツカミツオミツノであると思う。彼

は国引きの話で有名であるが、国引きと
いうのは、縄文海進が後退するとともに、
三瓶山の火山灰が斐伊川などによつて流
され、最初は島であった島根半島と陸続
きになり、出雲が広大な田地を有する甚
だ豊かな農産国になつたのを祝福する話
であろう。

とすれば、このオミツヌの時代に、ス
サノオに始まる出雲王朝は甚だ巨大な国
土をもつ王朝になつたといわねばならな
い。オオクニヌシは最初の名をオオナム
チといい、オミツヌの子のアメノフユキ
ヌの子であるが、おそらく卑母のためで
あろう、多くの王子のなかでもっとも身
分の低い王子であつた。これは、大きな
袋を背負つて兄神たちについていくオオ
クニヌシの姿をした「因幡の白兔」の話
によつてよく知られている。

王子たちが嫁にと願つたヤガミヒメ
は意外にもオオナムチを選んだため、オ
オナムチは兄神たちの憎しみを買ひ、二
度までも殺害される。そして母の力によ
つてオオナムチは再生するが、黄泉の国
のスサノオのところへ送られる。黄泉の
国でもオオナムチは再三試練に遭うが、
スサノオの娘のスセリヒメのとりなしに
よつて一命を助けられ、スサノオが油断
していた間にスセリヒメを伴つて出雲に
帰る。

この黄泉の国での試練を経験するこ
とによつてオオナムチは甚だ強い人間に
生まれ変わる。ヤチホコノカミというの
は、このような強い勇士に生まれ変わつ

たオオナムチの名であろう。こうしてオ
オナムチは兄神たちを滅ぼして出雲の王
になるが、ついに出雲ばかりか越の国を
攻め、そして領地を日本海一帯に広げ
るとともに、大和へ兵を進める。おそらく
オオナムチは大和をも占領して、日本の
国の約三分の一を領する大国の王、すな
わちオオクニヌシになつたのであろう。
大和にはこのような出雲王朝の支配の跡
が多く残っている。

オオクニヌシの滅亡

オオナムチによつて出雲の国は一挙
に拡大したが、国を巨大にすることと国
を治めることは違ふのである。幸いにス
クナヒコナという外来の神がやつて来て、
オオクニヌシの援助者となる。スクナヒ
コナは医学に通じていて、玉造温泉など
の温泉はスクナヒコナの発見によるもの
とされる。また農業技術にも詳しく、酒
造りに巧みであつたといわれる。おそら
く治国の術も十分心得ていたのであろう。
ところが、この二人の喧嘩の話が「伊
予国風土記」などに記されている。おそ
らくスクナヒコナはオオクニヌシとも
に一挙に巨大になつた出雲王国を治めよ
うとしたが、それはしよせん無理で、そ
の滅亡を予見したのではないか。やがて
スクナヒコナはオオクニヌシのもとを去
る。

そして出雲王国の分裂と外敵との戦
いの話は「播磨国風土記」に多く記され

る。オオクニヌシは子どもが大変多く、
その子どもたちは次の支配権をめぐつて
争つたにちがいない。「播磨国風土記」に
は、オオクニヌシと息子ホアカリ及びア
メノヒボコとの凄まじい戦いのことが語
られる。

そのころ、おそらくアマテラスの子孫
と称する天孫族の王朝が日向に出現し、
それが北上し、東征を試みたのであろう。
その経過はよく分らないが、日向を最
初の根拠地とした大和王朝はオオクニヌ
シに国を譲れと脅迫する。これが有名な
『古事記』における国譲りの話であり、
オオクニヌシは自分のために出雲大社と
いう巨大な社を建ててもらふことを条件
にして、この国の支配権をアマテラスの
子孫に譲り、稲佐の海に身を隠す。

以上の『古事記』などに語られる出雲
神話は、十分考古学的に裏付けられると
思われる。

出雲大社の建造

なぜ八世紀初めに作られた『古事記』
にこのような伝承が詳しく語られている
のか。そして、現在の約二倍の高さのあ
つた出雲大社がやはりこのとき建てられ
ていたと考えられる。なぜ巨大な出雲大
社が、出雲神話が詳しく語られている『古
事記』『日本書紀』が作られたとほぼ同時
に建てられたのであろうか。

現王朝にとつて、前代の王朝の王の霊
を手厚く祀る神社を建てることが、現王

朝の祖先神を祀ることとともに、皇室の重要な神事となる。それゆえに、皇室の祖先神を祀る伊勢神宮とともに現王朝に崇る前王朝の神社を祀ることが必要になる。新興貴族である藤原氏は、伊勢神宮とともにこのような鎮魂の大社、出雲大社を建てることよって祭祀権を独占しようとしたのであろう。

こうして、古代から伝承されてきた出雲王朝の栄えと滅びの話が詳しく記紀神話で語られ、そして巨大な鎮魂の大社、出雲大社が建てられる。このような鎮魂の神社を建て、そのように鎮魂された神々を、自家を守る神とするのは藤原氏のお家芸であったといわねばならない。

このようにして、聖徳太子も柿本人麻呂も菅原道真もまた現権力を守る神にとり入れられたのである。私の古代学は、この不比等の巧みな政治、宗教政策の発見よって生じ、そして藤原氏によつて葬られかつ祀られた聖徳太子や柿本人麻呂を復権させたが、その怨霊神の元祖というべきものはオオクニヌシであったのである。

平和革命の先駆者であるとともに、怨霊神として末永く日本を守ろうとしたオオクニヌシを復権させたい思いは切である。

瞑想回廊企画展示

平成二十一年度に開催された瞑想回廊企画展示をご紹介します。瞑想回廊企画展示は、哲学たいけん村のコンセプトに則り、訪れた人の「視覚」と「感性」に訴えかける仕掛けとして、開村以来毎年開催しています。二十一年度は、前期に碧南市在住の版画家鏑本達朗氏を、後期に名古屋芸術大学教授久野利博氏の作品を展示しました。

「隠蔽と表現のはざままで」 鏑本達朗リトグラフ展



七月二十八日から九月二十七日にかけて「隠蔽と表現のはざままで」鏑本達朗リトグラフ展を開催しました。作品は、一九八三年から二〇〇八年までに制作されたもので、六十二点のリトグラフ作品を展示しました。色彩豊かで幾何学的な鏑本氏の作品は、瞑想回廊の落着いた雰囲気によく馴染み、訪れた人々の目を楽しませていました。

「立ち現われる空間」

久野利博展



平成二十二年一月二十六日から三月二十八日にかけて「立ち現われる空間」久野利博展を開催しました。久野利博氏は、一九九八年にブラジルで開催された国際美術展第二十四回サンパウロ・ビエンナーレに日本代表として出展。国内外で活躍している現代美術作家です。今回の企画展示では、瞑想回廊内外にインスタレーション作品を設置しました。民具のような作品からは、どこか懐かしさを感じさせられました。

「にしばた哲学の小径俳句 i n g」

平成二十一年度「にしばた哲学の小径俳句 i n g」を六月七日に開催しました。

今回は、一般の部では一〇四名、小中学生の部では三二七二名の方にご参加いただきました。

この「にしばた哲学の小径俳句 i n g」は、哲学たいけん村無我苑から愛知県最大の自然湖沼「油ヶ淵」の湖畔にある「花しょうぶ園」や、蓮如上人ゆかりの「応仁寺」を巡る「哲学の小径」を散策していただき、自由に五七五を詠んでいただくイベントです。

投句いただいた作品の中から審査員の先生方の選考により選ばれました句を掲載します。



● 一般の部

大賞

デカルトもニーチェも知らず田螺鳴く

碧南市 小笠原翔江

特別賞

ジーパンの穴が気になる花菖蒲

安城市 横山鈴春

花菖蒲風摺り足で通りけり

安城市 山本英子

早苗田やニーチェ安吾と読み継ぎて

西尾市 富永幸子

菖蒲園むらさき色の風遊ぶ

名古屋市 川崎妙子

花菖蒲陰暦知らぬ人ばかり

安城市 大岡美智子

白菖蒲少し紫貰いけり

安城市 近藤絹代

きらきらと駆ける青田の水うろこ

名古屋市 本井曉子

無我苑は豊廊下や風知草

幡豆郡一色町 田中昌代

上品の彩賜りぬ花菖蒲

高浜市 安藤明女

● 小中学生の部

大賞

花しょうぶあぶらがふちでお出むかえ

鷺塚小学校三年 渡邊涼泉

特別賞

むがえんの時はゆつくりながれてる

大浜小学校五年 小田中秋人

つらいときかめばそこにはなしょうぶ

新川中学校二年 高田 汰

花しょうぶ空から見たいぼくの夢

大浜小学校五年 鳥居昂平

はなしょうぶ風になびけば気分は蝶

大浜小学校六年 中村優花

百万のちようがまうよな花しょうぶ

鷺塚小学校四年 山田万柚子

花しょうぶはずかしそうに見られてる

柵尾小学校四年 杉浦 匠

花しょうぶひとつひとつがわらつてる

柵尾小学校四年 鈴木優里菜

ふんすいの水がひらいて花みたい

西端小学校二年 岡村莞汰

天道虫私の手のひらお気に入り

西尾市鶴城小学校五年 今井かれん

にしばた哲学の小径俳句 i n g
平成二十一年六月七日(日)

午前九時〜午後四時

選者 小笠原和男(俳人、「初蝶」主宰、碧南市在住)

岡島礁雨 (俳人、碧南文化協会俳句部、碧南市在住)

服部くらら(俳人、「若竹」編集同人)

主催 碧南市教育委員会、碧南市観光協会

後援 碧南市、碧南市議会、碧南商工会議所、碧南市商店街連盟、碧南文化協会、碧南芸術文化振興会、西端区



「観月の会」横笛のひびき」
鯉沼廣行 金子由美子
和太鼓衆悟空

平成二十一年九月二十六日、無我苑瞑想回廊前中庭において、「観月の会」横笛のひびき」を開催しました。今年度は、開村五周年記念事業「秋韻 篠笛の世界」に出演していただいた横笛奏者鯉沼廣行氏と金子由美子氏に出演していただきました。



第一部として和太鼓衆悟空の皆さんに力強い和太鼓の演奏を披露していただきました。迫力ある演奏に会場は大いに盛り上がりました。和太鼓の後は、鯉沼、金子両氏による横笛の演奏です。美しい横笛の響きは、動的な和太鼓とは対照的に、時折吹く夜風にのって、会場全体を幻想的な雰囲気満たしました。

また、当日は、研修道場において橋川天山氏と祥友会の皆さんによる三曲演奏を開催。一方、なんば提灯ともす会により伝統的な「なんば提灯」が無我苑の各所に設置され、来苑者を楽しませていました。



平成22年度涛々庵茶会・三曲演奏予定表

月 日	涛々庵茶会		三曲演奏
	席 手	流 派	出演団体
4月25日	小笠原英美 (宗文)	久田流	祥友会・竹秀会
5月23日	山田 昇 (宗昇)	裏千家	菊香次社中・竹秀会
6月27日	杉浦 とめ (宗登)	久田流	若草会・竹秀会
7月25日	小林ミサ子 (宗実)	裏千家	絲音の会・竹秀会
8月22日	杉浦紀代子 (紀翠)	煎茶道松月流	祥友会・竹秀会
9月26日	杉浦 伸子 (宗伸)	裏千家	山本加代子社中・竹秀会
10月24日	藤原知香子 (宗知)	裏千家	祥友会・竹秀会
11月28日	高山 恵子 (宗恵)	表千家	若草会・竹秀会
12月19日	杉浦みどり (宗翠)	裏千家	絲音の会・竹秀会
平成23年 1月23日	杉浦 時子 (宗時)	宗徧流	祥友会・竹秀会
2月27日	小島 和美 (宗美)	裏千家	若草会・竹秀会
3月27日	沢田 教子 (宗教)	表千家	絲音の会・竹秀会

● お知らせ ●
涛々庵茶会・三曲定期演奏

涛々庵茶会は無我苑の市民茶室涛々庵(とうとうあん)を使用した市民茶会です。毎月それぞれの席主による創意工夫がなされ、華やかな茶会となっております。また、茶会に華を添える箏、三弦、尺八による三曲の定期演奏も研修道場安吾館

にて行っています。

涛々庵茶会は、毎月第四日曜日(十二月のみ第三日曜日)に開催します。料金は一服四百円、時間は各日とも十時から十五時まで(立礼茶席は十六時まで)です。また、三曲の演奏はお茶会にあわせ随時観覧無料で行っています。どなた様でもお楽しみいただける内容となっておりますのでぜひお越しください。

伊藤証信の遺品

武者小路実篤 自筆色紙

「無我愛」



伊藤証信と武者小路実篤

無我苑には、武者小路実篤自筆の色紙があります。いつ頃書かれたものかは不明ですが、実篤から証信に贈られたものようです。

証信と実篤には交友関係がありました。いつ頃知り合ったのかはわかりませんが、実篤は、証信が発行していた雑誌『無我の愛』を読んで感想の手紙を送っていました。ところで、証信とその妻あさ子は、『無我の愛』第四十一号（明治四十五年一月一日付け）に掲載された証信の短編小説「小説しづ女へ」の内容がもとで「家

「新しき村」を訪ねて

証信と実篤は、お互いに日向（宮崎県）の「新しき村」と西端の無我苑とを行き来したことがあるようです。実篤がいつ無我苑を訪ねてきたのか、その詳細はわかりませんが、証信が「新しき村」を訪ねた日時ははっきりしています。

証信が、新しき村に実篤を訪ねたのは、大正八年（一九一九）八月九日のことでした。証信は、座談会の講師として八月一日から五日までを香川県で過ごし、その後、二人の同行者と二日間をかけて新しき村に入りました。

証信達は村を挙げての歓迎を受けましたが、当時、村民は三十数名で、まだまだ事業は軌道に乗っていませんでした。出された食事は簡素なもので、監獄生活の経験のある証信に言わせると「食物はたしかに監獄以下で」あったそうです。村の住居は、大工の手を借りず、村民が各自の手で建てた掘っ立て小屋同然のもので、衣服も甚だ粗末なものだったそうです。そんな貧弱な衣食住に甘んじて毎日の重労働に耐えている人達が、夜ともなれば音楽に耳を傾けたり、将棋や碁を楽しんだり、書物を読んだりしている様子を見て、証信は次のように語っています。「一般社会では、貧乏な労働者などが、音楽や文学のような精神生活を楽しむのは、身分不相応でよろしくない」とされておき、その反対に高尚な精神生活を営む者は、貧弱な衣食住に甘んじて、労働に

従事することは、不見識の至りだとされている。そうして物質生活と精神生活とが、分裂してしまっている。これが現代社会に於ける、上流と下流との階級が、調和を欠くに至った一つの大きな原因ではなからうかと思う。ところが、この新しき村の生活状態を見ると、精神生活と物質生活が、微妙な調和を保ちつつ村民たちが、仲むつまじく暮らしている有り様を見て、言い知れぬ快感を覚えたのである」。また、村を視察した全体の感想として、証信は、「新しき村の各人が、人間の本性たる正直と愛の心を曲げないで、正しく強く生き抜こうとする欲求と、それがやがて社会を良くして行く最良法でもあると信じて、尊い使命観に生き、種々の困難と闘いつつある村民たちの勇ましい姿に、頭の下がる思いがした」と述べています。

十一日の朝、新しき村にいとまを告げて帰途に着く途中、証信は、実篤に新しき村の運営上抱えている問題点について尋ねました。実篤が挙げた問題点は、次のようなものでした。①村の経済の問題。今は苦しいが、努力を続けていけば、何年後かには自給自足が可能となる。②村に暮らす独身青年の結婚問題。村の事業に理解を示してくれる女性を見つけるとが難しい。③村民の子弟の教育問題。近隣の学校へ子弟を入学させると、村の外にあこがれを抱くことにつながり、将来村の事業に支障をきたす恐れがある。これを聞いた証信は、「こうした難問題

をかかえて、村民と一緒に研究しつつ幾多の障害を乗り越えて、理想の境地に到達しようとする武者小路氏の苦心は、察するに余りあるものがある」と語っています。

●武者小路実篤(むしやのこうじさねあつこ)

一八八五〜一九七六

明治・昭和期の小説家。小説、戯曲のほか、詩や画業においても活躍した。東京出身。子爵武者小路実世(さねよ)の四男として生まれる。初等、中等教育を学習院に学ぶ。学習院在学時に、『我儚悔』『我宗教』を読み、トルストイの強い影響を受ける。次いで、東京帝国大学文科社会科に進学するも中退。明治四十三年(一九一〇)四月、学習院時代からの友人志賀直哉、木下利玄らと雑誌『白樺』(しらかば)を創刊する。その中心的人物として活躍した。『白樺』は、単なる文芸誌ではなく、美術の評論なども掲載され、自我を肯定し、人間に内在する生命力を信じる理想主義、人道主義の立場をとった。当時の文壇のみならず、広く社会に文化的影響を与えた。大正七年(一九一八)、理想を実践するため、宮崎県児湯郡木城村字城に「新しき村」を建設した。昭和十二年(一九三七)、芸術院会員。昭和二十六年(一九五一)文化勲章受章。昭和五十一年(一九七六)四月九日死去。主な作品に『お目出たき人』、『幸福者』、『友情』などがある。

●「新しき村」

大正七年(一九一八)十一月、武者小路実篤が有志とともに、宮崎県児湯郡木城村字城に建設した理想主義的な共同体。労働と芸術活動の調和を理想の生活として、互いの個性を尊重する共働共生をはかり、社会的な反響を呼ぶ。大正末年まで武者小路実篤も在村、以後は村外会員として精神的、経済的に村を支える。ダム工事で大半が水没するが、昭和十四年(一九三九)埼玉県入間郡毛呂山町葛貫に「東の村」を建設。戦後は財団法人となって、養鶏などで経済的に自立。新しき村美術館も開館して現在に至る。

〈参考文献〉

『無我愛運動史概観』、千葉耕堂、音羽サーピスセンター、一九七〇

『新潮日本文学アルバム 武者小路実篤』、新潮社、一九八四、

『岩波日本史大辞典』、岩波書店、一九九

哲学たいけん村無我苑
案内ボランティア

哲学たいけん村無我苑には、ボランティアによる案内グループがあります。伊藤藤証信の無我苑や、現在の無我苑についてのお話をはじめ、哲学の小径、西端地区の歴史などを解説し、案内しています。

無我苑にお越しの際は、是非ボランティアの案内を受けてみてください。新しい発見があるかもしれません。案内をご希望の方は、日時、人数等を事前に無我苑にお知らせください。ただし、ボランティアの都合によりお受けできない場合がありますので、ご了承ください。



瞑想回廊の開苑時間が変わります



平成二十二年四月一日から瞑想回廊の開苑時間が変わります。今までは、午前九時から午後九時まで開苑していましたが、四月一日以降、開苑時間は、午前九時から午後五時までとなります。

なお、研修道場と市民茶室の開苑時間については変更ありません。今までどおりご利用いただくことができます。

瞑想回廊開苑時間	変更前	午前九時〜午後九時
	変更後	午前九時〜午後五時